

幼児教育史学会 会報

第 12 号

目 次

第 7 回大会案内・・・・・・・・・・・・・・・・大会準備委員会

会員研究情報・・・・・・・・・・・・・・・・立浪澄子、小柳康子、
和光大学保育実践センター有志研究会『イタリアプロジェクト』

新入会員・会員異動
寄贈図書
事務局からのお知らせ

第 7 回大会案内

幼児教育史学会第 7 回大会へのお誘い

太田素子（和光大学）

2011 年 12 月 3 日（土）第 7 回大会を和光大学で開催させて頂くことになりました。都内とはいっても、町田市が川崎市と境を接する東京郊外のキャンパスです。おいでいただくには新宿から約 1 時間、新横浜からも 1 時間弱見て頂かなければなりません。緑豊かな高台のキャンパスで一日をゆっくり過ごして頂けるよう計りたいと思います。もっとも、12 月になったら、メタセコイアの並木（あの冬ソナの並木と同じなのです）は、すっかり葉を落としているでしょう。せめて紅葉が残っていてくれるといいのですが。

和光大学は、1933 年に成城学園から分かれ、父母や教師を中心とした有志によって東京・世田谷に建てられた和光学園を母体として、1966 年に創立された大学です。澤柳政太郎（1865 年～1927）の胸像が敷地の中央にたてられています。初代学長梅根悟（1903 年～1980 年）が、教育の理想は人間の「個性的独創の無限の進展」を助けることにあると説いた澤柳精神を意識的に継承しようとしたのだと伝えられています。梅根悟自身は和光大学の創立にあたり、「大学は自由な研究と学習の共同体」であると理念の第一にうたいました。おかげさまで、教員も学生も自由闊達ですが、学生の学習意欲を励ます事は年々なかなかの難事になってきています。

2010 年度、和光大学の心理教育学科には小さな保育課程が誕生しました。保育士と幼稚園教諭を目的的に養成する課程です。以来、和光幼稚園、和光鶴川幼稚園のスタッフにも助けられながら、理念を模索すべく共同研究にとりくみ始めました。今年は私学振興財団の助成を受けて、北イタリアのプロジェクト・メソッドに学びつつ和光幼稚園の保育を検

証しようという共同研究をスタートさせました。今回の大会では、私たちの研究関心に即して、また幼保一体化と幼小接続をめぐる議論も視野に入れながら、シンポジウムを企画しました。詳細は他日ご案内しますが、タイトルとシンポジストを後ろに記しておきます。多くの皆さんのご参加と熱い議論を楽しみにしています。

幼児教育史学会第7回大会開催要綱

大会準備委員会

1. 期日：2011年12月3日（土曜日）
2. 会場：和光大学 E棟コンベンションホール（住所は、下記の6. と同一です）
小田急線：鶴川駅から南口より徒歩15分
または、北口からスクールバス、タクシーで5分
3. 時程（予定）
 - 受付： 9時10分～
 - 自由発表： 9時30分～12時30分（予定）
発表時間は1人25分（質疑応答5分を含む）
 - 昼食： 12時30分～13時30分：E棟4階 生協食堂が利用できます。
予約の方に幕の内弁当を準備します。
e-mailで太田宛お申し込み下さい（アドレスは7参照）。
 - 総会： 13時30分～14時20分
 - シンポジウム：14時30分～17時
 - 懇親会： 17時30分～19時00分
4. シンポジウム
 - テーマ： 「保育実践史の中のプロジェクト・メソッド」（仮）
 - 提案者： 橋本美保氏（東京学芸大学）、鳥光美緒子氏（中央大学）
浅井幸子氏（和光大学）
 - コメント： 宍戸健夫氏、中野光氏 司会：太田素子
5. 大会参加費等： 大会参加費 会員 2,000円 / 学生 1,000円
懇親会費 会員 3,000円 / 学生 1,000円
*前納方式は採りませんので、当日受付でお支払い下さい。
6. 自由研究発表申し込みについて
 - ①申し込み方法
同封の申込用紙にて、**9月20日（火：消印有効）**までにお申し込み下さい。
それ以外の方法では受付できません。ご了承下さい。
申込先：〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学現代人間学部
太田素子研究室気付 幼児教育史学会第7回大会準備委員会
 - ②発表資格
一般会員：申し込み時に年会費を納入済みのこと。
新入会員：申込日までに入会手続きを終え、年会費納入済みのこと。
 - ③受付確認と発表論文集原稿の提出
発表申し込みを受領次第、準備委員会から受付確認を送付します。
また、あわせて発表論文集執筆要綱を送付します。
原稿受付締切りは**11月15日（火：消印有効）**を予定。
7. 問い合わせ：和光大学・太田素子まで。e-mail：ohta-m@wako.ac.jp

☆和光大学へのアクセスは、次のHPでご確認下さい。

<http://www.wako.ac.jp/infomation/access.html>

☆宿舎のご予約は、町田、新百合ヶ丘、新宿などが便利です。

☆前日 12 月 2 日（金）、ご希望があれば和光幼稚園見学を企画します。

太田までご連絡下さい (ohta-m@wako.ac.jp)。

会員研究情報

松野クララ顕彰碑の建設にご協力ください

立浪澄子（長野県短期大学）

ご承知のように、松野クララ（1853～1931）は日本で最初に設立された官立幼稚園、東京女子師範学校附属幼稚園（1876 創立）の初代主任保姆を務めたドイツ人女性です。クララはドイツでフレーベルの幼児教育学を学び、日本人保姆の豊田英雄、近藤濱にフレーベルの恩物や遊戯を指導し、その教育思想を伝えました。また、東京女子師範学校保姆練習科で教えるなど日本の保育者養成に力を注ぎ、多くの先覚的な保育者を育てました。後に、女子学習院で音楽教師を勤め、西洋音楽の黎明期にピアノ奏法の指導にも開拓者としての役割を果たしています。

日本人男性松野礪と結婚したクララは夫と娘文がなくなった後、二人の孫を連れてドイツに帰りました。クララの二人の孫ヘルサ文（Hertha Fumi1898-1948）とヴァルデマー礪（Waldemar Hazama）は、1910 年 4 月 5 日、チューリンゲン地方ザールフェルト近郊の学校共同体ヴィッカーズドルフ（Schulgemeinde Wickersdorf）に入学しています。これはクララが日本を出国したと思われる 1910 年 1 月末と符合します。

ヴァルデマー礪は 24 歳で早世しましたが、ヘルサ文は結婚した後、二人の息子を残して 1948 年に死亡しています。ヘルサ文の次男ニコラウス・ハインツ（Nikolaus von Heinz）氏のもとにはクララが帰国時に持参したと思われるヘルサ文の洗礼証書、日本での戸籍関係書類、写真や手紙類が残されています。

立浪が 2010 年に渡独した際見せていただいたクララの両親の肖像画や夫松野礪の義兄長松幹（1834-1903）の肖像写真等を見ると、それらが第 1 次世界大戦、第 2 次世界大戦の混乱のなかでも大切に保管されてきたことがうかがわれました。

しかし、戸籍の記載によれば、クララは「昭和 6 年 7 月 18 日午後零時独逸国伯林ウィルマースドルフバイエリッセ街八番地ニ於テ死去」したということです。（小林富士雄著『松野礪と松野クララ-林学・幼稚園教育事始め』大空社 2010 p.163）

残念ながらクララが何時どこに埋葬されたかはわかっていません。ドイツでは一定の期限が切れたら管理者のいない墓は掘り起こされ、他に売買されてしまうそうです。

1930 年代、ヘルサ文は祖母クララの死の前後に前夫と 3 人の娘の事故死、再婚、二人の息子の誕生とめまぐるしい人生を送っていますから、その死後はクララの墓を知る人もいなくなってしまったのでしょうか。ハインツ氏は 1942 年生まれ、「私は母が亡くなったとき 6 歳でしたから、母から曾祖母の話を聞いた記憶はありません。」と残念そうに言われました。

2009 年 12 月、第 5 回幼児教育史学会で松野クララの研究発表を行った立浪はその後小林恵子氏から「青山の松野礪の墓地には最近りっぱな礪の墓碑が建てられた。クララの墓が不明ならば、せめて同地に眠る夫と娘の傍にクララの顕彰碑を建てたいので、協力して欲しい。」との依頼を受けました。長年日本保育史の研究に尽力してこられた小林氏のク

クララを思う熱意に打たれ、私を含む他の発起人の方々も次々に行動を起こされました。

そこで、松野礪と日本の山林学の歴史を研究しておられる元日本林学会長の小林富士雄氏を訪ね、顕彰碑建設へのご協力を依頼したところ、大変好意的に受けとめてくださり、墓地使用の許可願い等に並々ならぬご尽力をいただきました。



日独交流150周年
Jahre Freundschaft
Deutschland - Japan

松野クララ顕彰碑の建設にご協力ください



幼稚鳩巣戯劇之圖 (複製) お茶の水女子大学所蔵

原画は大阪市立愛珠幼稚園所蔵。本学附属幼稚園の園児たちが歌を歌いながら遊ぶ、開園当時の保育の様子を描いたもの。主任保姆の松野クララ、および保姆豊田美雄、近藤濱の姿も見える。

日本で最初の幼稚園(官立)は1876(明治9)年、東京女子師範学校(現・お茶の水女子大学)に創設されましたが、開園当時、主任保姆として指導にあたったのがドイツ人女性、松野クララ(旧姓 Clara Louise Zitelmann 1853~1931、ベルリン生まれ)です。

クララはドイツでフレーベルの幼児教育学を学び、日本人保姆の豊田美雄、近藤濱にフレーベルの恩物や遊戯を指導し、教育思想を伝えました。また、保姆練習科で教え、日本の保育者養成に力を注ぎ、多くの先覚的な保育者を育てました。

「幼稚園100年記念」の切手に採用された武村耕謫の絵には、子どもたちと一緒に遊戯(フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の「家鳩」)をしているクララの姿が描かれています。

当時、東京女子師範学校附属幼稚園の遊戯室にはピアノが一台ありましたが、これを弾けたのはクララだけでした。彼女が弾くピアノを子どもたちはいつも楽しみにしていたといいます。後に、クララは女子学習院で音楽教師を勤めましたが、明治初期の黎明期に彼女は西洋音楽を導入し、特にピアノ奏法の指導に開拓者としての役割を果たしました。

クララは、ドイツに留学し林学を学んでいた松野礪と婚約し、1876(明治9)年に来日、結婚しました。これは日本人男性とドイツ人女性との正式な国際結婚の第一号であります。やがて、娘の文(1901年死亡)と夫(1908年死亡)が亡くなった後、1910(明治43)年ごろ、二人の孫を連れドイツに帰国、その後、1931(昭和6)年ベルリンの地で亡くなりました。クララの墓は遺族や研究者が手を尽くして調査しましたが、今なお不明のままです。

わが国がドイツと国交を開いて「日独交流 150周年」を迎えた本年、日本の幼児教育、音楽教育の先駆者であるクララの功績を次代に伝えるため、青山墓地にある夫と娘の眠る墓のそばに顕彰碑を建立したいと心から願っています。

平成23年5月 発起人一同

その後、さらに多くの方のご賛同を得、いよいよ募金の開始に至りました。どうぞこの趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力をお願いいたします。

発起人 津守真 本田和子 宮里暁美 小林恵子 立浪澄子
賛同者（順不同）伊藤弘子、岡田正章、宍戸健夫、羽入佐和子、大戸美也子、津守房江、石橋哲成、小川清実、荘司泰弘、湯川嘉津美、高橋恵子、金田利子、藤田英美子、大伴栄子、秋田喜代美、エリザベート・ヒュープラー・梅本、酒井玲子、曾我芳枝、石井達子、豊田一秀、小川博久、柴崎正行、和田昭允、松岡享子、川上冴子、吉原紀子、公益財団法人日独協会、お茶の水女子大学附属幼稚園、大阪市立愛珠幼稚園

（文責 立浪澄子）

松野クララ顕彰碑の建設計画

- ◇建設場所 東京青山墓地にある夫の松野礪の墓地内、
- ◇顕彰碑完成予定日 2011（平成23）年11月
- ◇顕彰碑のデザイン、形状、大きさ等、松野礪の墓碑とのバランスを考慮し、「幼稚鳩巢戯劇之図」を陶版画として石にはめ込む予定。
- ◇募金目標額 200万円
- ◇募金額 一口 3000円以上
- ◇募金送付先 ゆうちょ銀行 郵便局 「松野クララ顕彰碑建設基金事務局」
口座記号番号 00160-4-710652
- ◇募金期間 2011年8月末日まで

募金にご協力いただいた方には、顕彰碑の完成後、お送りする報告書にお名前と碑の写真に記載し、お礼とさせていただきます。

- ◇松野クララ顕彰碑建設基金事務局
〒185-0033 東京都国分寺市内藤2-26-32 小林恵子方
- ◇連絡先 stachinami@nagano-kentan.ac.jp（立浪澄子）

戦前の雑誌『家の光』における「健康相談」

小柳康子（福岡大学）

第6回幼児教育史学会で「高度経済成長期農村の教育家族の拡大」を報告させていた。会員の皆様に質問をいただき、多くの研究の示唆を与えていただいたことに深く感謝している。門外漢の私が、このような農村家族の子育てや教育に関心を持ったのは、太田素子氏の近世の農村の子育ての実証的な研究を読んだことがきっかけであった¹⁾。新中間層のものとされた熱心な子育てが、農村の旧中間層にみられたことは注目された。

子どもを一人前にするために農村家族は何に価値を置いたのか²⁾。これが私の問題関心である。私の研究はまだ始まったばかりであるが、今回は、戦前『家の光』（産業組合中央会、中央農業会、全国農業会）を対象に、読者投稿による「健康相談」の一端を紹介させていただきたいと思う。

戦前『家の光』を対象にした研究は、板垣邦子をはじめ安達生恒、山野晴雄、成田龍一、木村壽子、奥井亜紗子、河内聡子等枚挙に暇がない。しかし、「健康相談」はなされていないため取り上げた。1920年代の『家の光』における「健康相談」欄は、読者の質問に対して専門の医師が回答するコラムである。名称を変えて1927年1月から29年10月迄開設された。相談者は男性の氏名もあり、母親だけとは限っていない。子育てに関連する相談

内容をまとめると小児科 52 件、産婦人科 48 件計 100 件であった。

小児科に関する相談内容を類型化すると、多い順に「感染症・寄生虫の手当て」46.2%、「育児風習」15.4%、「育児行為」13.5%、習癖（夜泣き、夜尿等）7.7%である。百日咳の手当てを尋ねる相談が最も多く、乳幼児の栄養状態の低下を窺わせる。相談に多い疾患は、当時の農村の乳幼児の有病率と同様の傾向を示しており（1929 年『農村保健衛生実施調査成績』）、相談の関心は子どもをいかに養生させるかであった。

次に多い「育児風習」の相談には、「昨年秋生れの赤坊…略…舌が厚く爛れて乳白」になったが、「母は之は白舌だと申し生鱈（どじょう）のつるつるした液をつけると良いと云ひます。」「そんな事をして差支へありますまいか…」³⁾。さらに、「生まれたばかりの赤ん坊は湯へ入れないと育たないと申しますが、…母は、『なあに赤ん坊を毎日お湯に入れなくても育つ』と云つて訊きません…」⁴⁾ 等である。ほんの一例であるが、引用文は、科学的な育児法と経験的な育児法の世代の間の子育ての認識の違いから相談されている。そして、育児風習は、回答者の医師によって小児科学を論拠に一喝されていた。このように、健康や衛生に関する読者投稿欄を設けたこと自体、それに価値を置いたことが窺える。そして、「健康相談」への医師の回答は、経験的育児ではなく衛生的で科学的であるべきという言説を構築させている。ただし、その一方で、同時に窺えることは、経験的な子育てに自信を持つ親が存在していることである。引用文に限れば、農民は科学的な育児法に必ずしも従っていたわけではなかったことが読み取れる。

本研究には課題も多い。今後、戦後の言説検討に当たっては、先行研究を十分抑えるとともに、統計的文献とも照合する必要がある。言説分析の限界性を念頭に、データの収集が恣意的なものとならないようにする方法を模索していきたい。

<参考引用文献>

- 1) 太田素子「<子育ての歴史>研究の課題と展望」『日本教育史研究』日本教育史学会、2000年。同『子宝と子返し—近世農村の家族生活と子育て』藤原書店、2007年。同、『近世の「家」と家族—子育てをめぐる社会史』角川学芸出版2011年他。
- 2) 親と子どもの教育的な関係を知ることは、幼児教育史研究において重要な課題である。宮澤康人『大人と子どもの関係史序説—教育学と歴史的方法』柏書房、1998年、381頁。
- 3) 新潟清子「健康相談」『家の光』7月、産業組合中央会、1927年、47頁。
- 4) 秋田千代子「健康相談」『家の光』1月、産業組合中央会、1927年、27頁。

北イタリアの保育研究にどう学ぶか

和光大学保育実践センター
有志研究会『イタリアプロジェクト』

和光大学の小さな保育課程は、出発から2年目を迎えて、課程に在籍する学生がやっと50人を超えた。まだ立ち上げの実務も忙しいのに、私たちはこの4月から、小さな研究会を出発させている。研究会は、既に40年の歴史を持つ和光幼稚園、和光鶴川幼稚園の保育内容研究の足跡に理解を深めると共に、課程教育の理念についてともに考え、共通基盤を固めるために始めたものだ。

研究会では、和光学園の幼児教育を理解する一方で、今世界的に注目されているレヅジョ・エミリアの保育など、北イタリアの保育研究に注目してみる事にした。一方で国際的な評価を受けている異文化の保育について理解を深める作業が、和光の保育を考える私たちの視野も豊かにしてくれるに違いないという、とても欲張った研究計画を立てたのである。会員の浅井幸子、林浩子などが、それぞれ佐藤学、佐伯日半の研究活動に啓発され、

レヅジョ教育に造詣が深かったという事情もあった。

研究会はまだ3回を数えたばかりで、邦訳論文や著書を分担して読んでいる段階だ。しかし、そうした中で、レヅジョ教育を歴史研究者として対象化する事が、アメリカ経由の現在のレヅジョ理解とはひと味違った視野を与えてくれるかも知れない、という期待ももち始めている。幼児教育史学会では、第5回大会のときに前之園幸一郎氏が、イタリア幼児教育史研究について問題提起をされた。氏の研究生活全体から到達された含蓄の深い問題提起だったと受け止めているが(会機関誌第5号参照)、その問題提起に、私たちは北イタリアの保育研究の側から近づいてゆくことも出来るかも知れない、などと――。

そんな期待をもたせてくれたきっかけは、会に参加している若手研究者浜田真一さん「ローリス・マラッグツツイの幼児教育思想－progettazione 形成過程に焦点を当てて」の報告が与えてくれた。この報告は、浜田さんの修士論文(山梨大学大学院)を元にした報告で豊富な内容をもっているが、太田素子や浅井幸子など、研究会の「歴史屋」はもっぱらセレスタン・フレネ(1896-1966 仏)の文集作りの教育活動と接点をもつMCE(Movimento di Cooperazione Educativa)に関心を集中し、レヅジョのプロジェクト活動が物語作りから視角的なファンタジーへと展開してゆく前後の教育思想を探ろうと議論に花を咲かせたのである。勿論そこには、日本の生活綴り方教育とフレネ思想の比較、初期の物語作りと日本の「話し合い保育」や劇遊びの実践史との比較、ドキュメンテーションの思想と「学級通信」の比較、図像表現への展開の意義など、日本の保育実践史と深いところで共鳴しそうな、あるいは異質な文化の深みを暗示するかも知れない多くのテーマがそこにあると予感させてくれたからだ。同時にそこには、前之園氏が「子どもの発見」にこめた学習の主体としての子ども観、フレネ教育のテーマ「イニシアチブ」と、レヅジョの『学び』の、ほのかに予感される水脈がありそうだ、ということでもある。比較幼児教育史という視野が実際に拓けてくるかどうか、今後の共同研究を楽しみにしている。(文責有田詩緒里。太田・浅井との討論を元に有田が文章化しました。)

寄贈図書

日本大学教育学会紀要『教育学雑誌』第45号 教育学科創設60周年記念特別号
(日本大学文理学部教育学科 2010年3月)
酒井玲子『わが国にみるフレール教育の探求』 (共同文化社 2011年4月)

事務局からのお知らせ

(1) 第7回大会

第7回大会案内を掲載しました。奮ってご参加ください。また、研究発表申込書を同封いたしました。多くの会員の発表申し込みをお待ちしています。

(2) 会費納入のお願い

第6回大会年度(2010年10月1日～2011年9月30日)の会費納入用振込用紙を、昨年11月末(機関誌送付)、ならびに4月初旬(会報第11号)にお届けしました。

今回、会報第12号に振込用紙を同封させていただきましたのは、2011年6月30日時点で、第6回大会年度およびそれ以前の会費が未納であった会員のかたがたです。よろしくお願いたします。

会費は7,000円(学生会員4,000円)、郵便振替口座は[00190-9-73668 幼児教育史

学会]です。

(3) 学会ホーム・ページ

幼児教育史学会のホーム・ページには、会報に載せられなかった事務局からのお知らせなども掲載しています。会報は、第9号以降のWeb公開版をご覧くださいことができます。ご利用ください。

(4) 会報原稿の募集

会報を通じて、研究情報の提供ならびに研究者間の交流に努めます。会員研究情報、海外幼児教育だより、提言などをお寄せください。分量は、3,000字程度で、メール、または郵便で（なるべくデータを付けて）事務局宛に送ってください。年2回の会報発行時（2月、6月を予定）までに届いた分を、随時掲載します。

(5) 住所変更等の届出のお願い

会報・機関誌はメール便を使っておりますので、住所変更のご連絡がない場合はお届けができなくなります。必ず変更届をご提出ください。

(6) 役員選挙

9月に理事会選挙を行います。役員選挙の名簿掲載者につきましては、第5回大会年度（前会計年度）の会費納入を8月末日までに完了している会員とし、会報第11号でお知らせした納入期限を2か月延長いたします。

幼児教育史学会会報 第12号 2011年7月4日

編集・発行 幼児教育史学会事務局 榊 瑞希子
〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550
聖徳大学大学院教職研究科 榊 研究室 気付
TEL: 047-365-1111 (代表)
E-mail: admin@youjikyokushi.org
学会 HP: <http://youjikyokushi.org>

郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会